



Title	文殊山石窟ウイグル語銘文についての覚書き
Author(s)	橘堂, 晃一
Citation	石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究. 2024, p. 11-21
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/94648">https://hdl.handle.net/11094/94648</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 文殊山石窟ウイグル語銘文についての覚書き

橘堂 晃一

## 1. はじめに

ウイグル仏教の歴史的展開を語る時、その最晩期の残照として必ず言及されるのが『金光明最勝王経』(Uig. *altun öylüg y(a)ruq qopda kötrülmiš nom iligi atly nom bitig*. 金色の光明ある、すべてに勝れる、経の王という名の経典。以下、AYS とする)である。これは 11 世紀頃に活動したベシュバリク出身のシンコ・シェリ・トゥトゥング (Uig. *Šinqo Šäli Tutuŋ* < Chin. 勝光闍梨都統) によって義浄訳からウイグル語に翻訳され、ウイグル仏教徒の間で長く伝持された経典である。

敦煌・トゥルファン地域から収集された AYS の多種の写本、版本の断片のなかでも、S. マーロフが肅州で入手した写本 (以下マーロフ本 AYS) は、とりわけ重要である。1910 年、肅州付近の新しい洞窟寺院にガラクタのように置かれていた 235 葉と現地の人間から入手した 162 葉の合計 397 葉という分量は、ウイグル語仏教写本として最もまとまった内容を保存する。しかも第一、三、四、五、六、七巻の奥書には、大清康熙 26 年 (西暦 1687 年) に書写されたことが記されている。これは現在知られているウイグル語仏典として最も新しい写本である。これに次ぐ新しい紀年を有する資料は、至正 24 年 (西暦 1361 年) の紀年をもつ印刷仏典である<sup>1</sup>。両者の間には約 300 年の隔たりがあり、マーロフ本 AYS の特殊性を際立たせている。

マーロフは、写本の入手場所について、Vunfygu~Vunšingu という中国人の集落の一寺院でこれらを手に入れたと記録している<sup>2</sup>。これが「文殊口」の音写であることは、夙に濱田正美によって指摘されているところである<sup>3</sup>。ここに言う文殊口の仏教寺院とは、現在、全国文物保護単位に指定されている文殊山石窟のことである。

<sup>1</sup> ツィーメ・百濟 1985, 31-32 頁。

<sup>2</sup> Radlov, Malov 1913, pp. I-II.

<sup>3</sup> 濱田 1983, 702 頁。

近年、文殊山石窟の前山区万仏洞において、明嘉靖3年（1524）から清康熙52年（1713）の間に書かれたウイグル語銘文14条のテキストと訳注が、イスラ菲尔・玉素甫と張宝璽によって発表された<sup>4</sup>。とりわけ我々を驚かせたのが、銘文に記された Bilgä Taluy Toyin なる僧侶の名が、マーロフ本 AYS の識語にも写経者・施主の一人として見えており、どうやら同一人物の可能性があった<sup>5</sup>。

筆者は2023年8月26日に文殊山石窟を参観する機会を得た。限られた時間であったため、マーロフ本 AYS との関連から、とくに重要と思われる第168-1号銘文の読みの確認に時間を充てた。その結果、イスラ菲尔・張2012で提出されたテキストを改訂することができた。本報告は、そのテキストと語注、およびマーロフ本 AYS の識語についての覚書きである。

## 2. 文殊山石窟

文殊山石窟は、甘粛省肅南裕固族自治州祁豊鎮、酒泉市西南15kmの嘉峪山山中に位置する。前山区と後山区の両区域に分かれており、比較的規模の大きな石窟を形成していた。『重修肅州新志』によれば、かつては「三百禪室」あったと伝えられる。開鑿された時期は史書にみえないが、北朝期の中心柱窟、壁画が確認されている。また、1326年、喃答失太子によって立てられ、前山区の聖寿寺に保存されていた漢文・ウイグル文合璧「重修文殊寺碑」によれば、「所觀文殊聖寺古跡建立已經八百年矣」とあり、その創建が北魏時代に遡ることが知られる。現在はチベット仏教寺院の他、儒、仏、道の三教が混交した複数の寺院が活動しており、遺跡としての石窟寺院と並存している<sup>6</sup>。

## 3. テキストと訳注

イスラ菲尔・張2012で報告されたウイグル語銘文は全て前山区の第1窟、いわゆる万仏洞に書かれたものである（図1）。万仏洞は、幅5.7×奥行5.8×高さ3.71mの中心柱窟の構造をもつことから北朝時代に開窟され、西夏時代の

---

<sup>4</sup> イスラ菲尔・張2012.

<sup>5</sup> イスラ菲尔・張2012, 94頁.

<sup>6</sup> 姚2019, 2-3頁.

壁画が残る（上生経变，西方浄土变など）<sup>7</sup>。

報告によれば，ここに西夏語銘文 1 カ所，ウイグル文字モンゴル語銘文 1 カ所，ウイグル語銘文 10 カ所（14 条）が確認されている<sup>8</sup>。しかし写真からはチベット語，漢字銘文も確認できるようである。

イスラ菲尔・張 2012 は，デジタル写真から銘文を解読したと思われる。報告中の銘文に不規則な番号（第 159, 163, 168-1, 168-2, 170-2, 171 号など）が与えられているのも写真番号に準じているからであろう。

本稿で検討する第 168-1 号銘文は東壁に描かれる上生経变の直下に位置している（図 2）。前述の理由からイスラ菲尔・張 2012 では 24 行で一つの銘文のように扱われているが，実際には 1～6 行と 7～24 行，書体も年代も異なる二つの銘文からなっている。マーロフ本 AYS と密接に関連するのは後者の部分であるが，以下に掲げるテキストでは，対照の利便を考慮して，イスラ菲尔・張 2012 のテキストに準じて 2 条の銘文を提示する。

#### 凡例

- [ ] ... 破損部分  
 ( ) ... 推補された語句  
 < > ... 右側に補足された語句  
 // // ... 判読できない残画  
 : ... 「>」のように書かれた句読点もしくは埋め草。

#### 第 168-1 号 ウイグル語銘文

- 01 wan li yg(rmi ... yıl ... ay-nıñ)  
 02 iki yañı-sı biz bu(d)abali toyın  
 03 v(a)çir r(tna? toyın)//r'mysk'p upası  
 04 t'//[ ] upası tardı  
 05 sayın bul(d)an upası ävlügi birlä  
 06 kälip yükündük  
 ----- (以下，別個の銘文)  
 07 ema ho qutluğ bolsun  
 08 biz k(a)plan toyın qunčum toyın  
 09 bodi töküž upası : badum tärim <tämir baş oğul>-ta

<sup>7</sup> 姚 2019, 5 頁。なお，壁画を西夏時代のものとするには疑義も提出されている（楊 2015 参照）。

<sup>8</sup> イスラ菲尔・張 2012。

- 10 ulatı adın aʒun-qa sanlıy  
 11 bolmış ögmüz bađmi tarı-  
 12 nıy mañalı söñük-in  
 13 bo aranyadan tay-ta  
 14 yätgürüp buyan ävirip <uṭlı ündürüp> yandıq  
 15 kinki-lärkä öṭüg bolzun  
 16 kälmiş anča kişi-lär v(1)rs(1)ṅ :  
 17 mäñi iskäp toyın :  
 18 särinmäk toyın  
 19 bilgä taluy toyın ıqbal u  
 20 toyın solčum toyın ratna v(a)čir  
 21 šabi töčük irsimšü šabi  
 22 v(a)čir küzätgü širmanri-ta  
 23 ulaṭı : bo kün-tin yaqru  
 24 ädgülük bolzun sadu

## 和訳

(1-6行)

万曆二十…年…月二日 上旬，我々，ブツダバラ道人，ヴァジュラ・(ラトナ道人?)，…優婆夷，T'////優婆夷，タルドウ・サユン・ブルダン優婆夷〔と〕その妻子とともに来て礼拝した。

----- (以下，別個の銘文)

(7-23行)

E MA HO! 幸いあれ! われら，カプラン道人，クンチュム道人，ボーディ・トキユズ優婆夷，バドウム・テリム，テミュル・バシユ・オグルらは，他の世界に属するものとなった (=亡くなった) われらが母，バドミ・テリの吉祥なる舍利をこの阿蘭若の山に至らせて，福德を廻向して果報をのぼらせて戻った。後人たちの記念となれ。〔一緒に〕来たのは以下の人々・仏僧である。メンギ・イスカップ道人，セリンメック道人，ビルゲ・タルイ道人，ウクバル道人，ソルチュム道人，ラトナ・ヴァジュラ沙弥，トチュク・イルシムシユ沙弥，ヴァジュラ・キュザトギユ沙弥尼らである。この日から近くに善あれかし。善哉。

## 語注

- 01) wan li: < Chin. 万曆. 二十年代は西暦 1592~1601 年にあたる.
- 02) bud(a)bali toyin: < Skt. buddhabala. あるいは bud(a)pali < Skt. buddhapāla の可能性も排除できない. toyin < Chin. 道人. 仏教僧侶を指す. ただし, マーロフ本 AYS では, 同一人物が, toyin と šabi (具足戒を受けていない見習い僧) を時系列に関係なく混用されている (šabi よりも先に toyin を称している場合もある). これは書写人の誤った記憶に起因するものかもしれない.
- 07) ema ho: < Tib. e ma ho. イスラ菲尔・張 2012, p.98 は, 六字真言「唵嘛呢叭咪吽」の簡称とするが, ここは文章の一節に特別な重みを与え, 強調するために文章の冒頭に使われる憐憫, 驚嘆を示す感嘆詞とみるのに従いたい (Zieme 1991, p. 283). イスラ菲尔・張 2012 に言及はないが, とくに注目したいのは, この感嘆詞がマーロフ本 AYS の巻第 5 と巻第 8 において, 章番号と葉番号を示す帖付けにも書写されている点である. 例えば次のようである. emaho sekizinč ülüš on 「emaho 第 8 章 10 (葉)」<sup>9</sup>. しかも, 同じく e ma ho を帖付けに使用している巻第 5 の識語には, イスタブリ道人 (istavri toyin), スヴァステイ道人 (suvasti toyin), ビルゲ・タルイ道人 (bilgä taluy toyin) の 3 人の持戒者? (caqšapat mañal) によって書写されたことが記されているが, このうちの一人, ビルゲ・タルイ道人の名は, 第 168-1 号銘文にも確認される. また巡礼の同行者であるラトナ・ヴァジュラの名もマーロフ本書写の発願者として確認される場所である. イスラ菲尔・張 2012 は, 銘文と写本にみえるビルゲ・タルイ道人を同一人物とみることに慎重であるが, 人名, 時期, 書写伝統 (e ma ho) の一致から, 同一人物とみて差し支えない.
- 08) k(a)plan toyin qunčum toyin: イスラ菲尔・張 2012 は qavčum と読む. 順治 15 年 (1658) の紀年をもつ第 172 号銘文の 4 行目に kápālin toyin qunčuy šabi とある二人もこれと同一人物である可能性が高い.
- 13) aranyadan tay-ta: イスラ菲尔・張 2012 は arıytn tay-tın と読む. aranyadan < Toch. B āraṇyātan ~ aranyatan < Skt. āraṇyāyatana 「坐禅処, 僧院」. 榆林窟のウイグル語銘文では tay aranyadan と, 本銘文とは逆の語順で在証される (松井 2017, 19 頁).
- 16) v(i)rs(i)ŋ: イスラ菲尔・張 2012 はこの語を欠落する. v(i)r は「仏」の漢字音 (庄垣内 2003, 133), s(i)ŋ は「僧」の漢字音 (庄垣内 2003, 134 頁) である. これで「仏僧」すなわち出家僧侶を指す. 銘文中で人名の後に toyin 「道人」が付される人物がこれにあたる.

<sup>9</sup> Kaya 1994, p.280.

19—20) *ıqbal u toyın*: *u* は *toyın* と書くべきところを *upası* と誤って書こうとしたことに気づき止めたのかもしれない。 *ıqbal* は、ペルシア語 *iqbāl* 「前進」に由来するムスリム人名。楡林窟の銘文にも在証例がある（松井 2017, No. 105）。筆者は、今回の参観において後山千仏洞（第10窟）にも同一人名を確認した。

20-21) *ratna v(a)čir šabi*: *ratna včir* < Skt. *ratnavajra*. 伊斯拉菲尔・張 2012 は、テキストと翻訳では *ratna v(i)čay* と読むも、語註では *ratna v(a)čir* とする。 *Ratnavčir* は、マーロフ本 AYS 巻第 1, 3, 4, 5, 7 の識語にも施主 (*buši idisi*) の一人として名を連ねている。おそらく同一人物であろう。

22) *v(a)čir küzätgü*: 伊斯拉菲尔・張 2012 は、*v(i)čay közätü* と読む。

23) *bo kün-tin*: 伊斯拉菲尔・張 2012 は、*bo buyan-tın* と読む。

#### 4. マーロフ本 AYS 識語との関係

文殊山石窟のウイグル語銘文は、壁画が描かれた時に付帯して書かれたものではなく、後代の巡礼者が書き残した記念 (*ötig*) である<sup>10</sup>。万仏洞第 168-1 号銘文を検討した結果、巡礼同行者として名を連ねるラトナ・ヴァジュラ沙弥 *Ratnav(a)čir šabi* とビルゲ・タルイ・道人 *Bilgä Taluy Toyın* が、マーロフ本 AYS の識語に記載される人物と同一人物である可能性が高いことを確認した。

ここではまず、両人の名が現れるマーロフ本 AYS の識語から、両人の関係性を確認しておきたい。

##### マーロフ本 AYS 巻第 5 の識語<sup>11</sup>

*y(e)mä buši idisi süzök köñüllüg ratnavačir ıqıaŋsman ikägünün kertügünčinä: altun yaruq öñlüg y(a)ruqluy nom ärdinig ötünmäk üzä erinč č(a)hšap(a)t maŋal toyın bešinč aynıñ y(e)g(i)rmi ikisi : ki toŋuz : či tegmä tutmaq kün qamay pınsun tınl(ı)ylar asıyıña yayızıña enär kün üzä toŋkuvan balıqda ratnav(a)čirniñ evintä biz č(a)hšap(a)tmaŋal ısdavrı toyın : svastı toyın : bilgätaluy toyın üçägü başlayu bitidük : yänä altınč aynıñ altı yaŋısı šim sıçyan y(e)mä či tegmä tutmaq kün üzä y(e)mä ısdavri toyın bešinč küin nomug bitiyü tolu qıltım: ädgü ::*

<sup>10</sup> Matsui 2023, p. 177.

<sup>11</sup> Kasai 2008, p.28.

また、施主、清き心もてるラトナ・ヴァジュラ (Skt. ratnavajra) とウク  
 ウアンスマン (Tib. rkyan-sman) の二人の信心により、『金光明経』を請  
 願によって、賤しき持戒者道人が、5月22日、己亥の執といわれる“執  
 る”日、衆生のため諸尊 (pinsun < Chin. 本尊) が大地に降臨し給う日に、  
 東関の城のラトナ・ヴァジュラの家にて、我ら持戒者、ウスダヴリ道人、  
 スヴァスティ道人、ビルゲ・タルイ道人の三人がはじめに書写した。そ  
 して6月6日、壬子のまた執といわれる“執る”日に、またウスダヴリ道  
 人が第五巻の経典を書写し終えた。善哉。

#### マーロフ本 AYS 巻第3の識語<sup>12</sup>

tay čin kuo kañ si y(e)g(i)rmi altınč otčuq-taqı oot qutluğ tavişyan yıl kuu yi  
 hua vihar-qa tayaqlıy bilgä taluy šabi: ratna v(a)çir-nıñ ötükiğä toñkuvan  
 suzaq-ınta onunç ay y(e)g(i)rmi törti qutluğ kün üzä bitiyü tolu boltı :: kenki  
 tözünlärkä otüg bolzun sadu ::

大清国康熙26年、燃える火の元素の卯の年、帰華寺によれるビルゲ・タ  
 ルイ沙弥は、ラトナ・ヴァジュラ沙弥の請願により、東関の村にて10月  
 24日の幸いある日に書写し終えた。後の聖者たちに記念となりますよう  
 に。善哉。

これらの識語によれば、ラトナ・ヴァジュラ沙弥が施主としてAYSの書写  
 を発願し、ビルゲ・タルイ道人が書写人の一人として参加していたことがわ  
 かる。発願の目的は、亡き父母の往生浄土のためであることが「廻向文」に  
 記されている<sup>13</sup>。

護1997によれば、マーロフ本AYSの書写は、巻数順に行われたわけでは  
 ない。紀年が確認できるものを列举すれば、巻第5(康熙26年6月6日)、  
 巻第6(6月22日)、巻第7(6月24日)、巻第4(8月15日)、巻第1(10月  
 24日)、巻第3(10月28日)、そして最後に書写された廻向文(buyan  
 ävirmäk)は、康熙27年10月30日となっている<sup>14</sup>。書写を終えた写本が、

<sup>12</sup> Kasai 2008, pp.88-89.

<sup>13</sup> 「この金光明経を写させた加持力によって、先に亡くなった父母が極楽に生まれ  
 ますように」 bititmiş bo altun y(a)ruq nom ärdini-niñ ađiştir küçintä : burun ärtmiş  
 ög qañ-larım tuğzun sukavati-ta. Kasai 2008, p. 106.

<sup>14</sup> 廻向文は、Tekin 1966 によってはじめて発表された。Kasai 2008, pp.101-110 も参

一卷完成するごとに文殊山の某寺に奉納されたのか、それとも全体が完成してまとめて奉納されたのかはわからない。少なくとも万仏洞のウイグル語銘文に奉納に関わるものはみつかっていない。

書写が行われた場所は、濱田正美が明らかにしたように、肅州城の東側に付設して増築された東関（もしくは東関廂）にあった帰華寺（Kuu yi hua vihar）においてであった<sup>15</sup>。『重修肅州新志』によると、帰華寺は「哈密衛の浄脩国師必牙刺失力の娃子、拝言卜刺が建てたものである。拝言卜刺の父は哈密にあって居住していたが、成化の間（1465-87）にトゥルファン王子速瓦亦思（及び）速檀阿力の搶掠を被り、（哈密に）存し難く、正徳（1506-21）の初、部落を率いて肅州に投順したので、その進貢を准した。現在都督の訕吉卜と拝言卜刺が新旧の哈刺灰二種及び畏兀兒一種の夷人を管束している。その故に関廂に於いて寺を建て、帰華寺と言っている」とされるところである<sup>16</sup>。当時、肅州城の東関は、外国の使節団や商人など、各種の外国人が宿泊していた。なかには居を定めて進貢の拠点とするものもいた。榎一雄は、そのような中国内地である肅州に住みついた外国人たちの姿を「寄住」「寄居」をキーワードに炙り出した<sup>17</sup>。一例を挙げると、「万曆四年二月乙酉（1576年3月31日）、肅州衛東関廂寄住罕東左衛都督同知阿東把力并隨員正副使虎都帖木兒等入貢、賞給如例」（『明神宗実録』巻四七）とある。これは、罕東左衛都督同知等が肅州城東関廂に寄住し、入貢している例である。

AYS を書写奉納し、文殊山巡礼を行っていたウイグル人たちもそのような移住した仏教徒であったと思われる。先に紹介したマールコフ本AYS巻第3の識語には次のような表現があった。「帰華寺によれるところのビルゲ・タルイ沙弥 kuu yi hua vihar-qa tayaqlıy bilgä taluy šabi」。下線部「よれるところの」は tayaqlıy を翻訳したものである。この語はウイグル語仏典では「依」を翻訳するのに使用されることが多いが、この場合は「寄住」「寄居」の透写語の可能性もある。このことと『重修肅州新志』「帰華寺」の記事と考え合わせるならば、肅州東関の帰華寺には、哈密から寄住したウイグル人仏教徒のコミュニティーが存在し、彼らが様々な仏事を行っていた様子が想像されるのである。

---

照せよ。

<sup>15</sup> 濱田 1983.

<sup>16</sup> 訳文は濱田 1983 に依る。榎 1979, 163-164 頁も参照せよ。

<sup>17</sup> 榎 1979.

## 5. 今後の課題

文殊山石窟万仏洞第 168-1 号銘文の解読を通じて、マーロフ本 AYS との関係やその背景について思いつくところを書き連ねてみた。今回確認できたのは 14 条ある銘文のうち 2 条のみであるが、それでもウイグル仏教史にとっていくつかの重要な視座を得ることができた。残る銘文についても伊斯拉菲尔・張 2012 を手がかりに、現地調査に基づいた読み直しが求められよう。

なお、今回の参観では後山千仏洞（第 10 窟）の中心柱の基台部分にもウイグル語銘文 4 カ所の存在を確認することができた。これらもウイグル仏教最晩期の姿を垣間見せる貴重な資料となることが期待される<sup>18</sup>。

### 参考文献（著者名 A B C 順）

榎一雄 Enoki Kazuo

1974 「明末の肅州」、『宇野哲人先生白寿祝賀記念 東洋学論叢』東方学会（『シルクロードの歴史から』研文出版，1979 年，151-170 頁に再録）。

濱田正美 Hamada Masami

1983 「肅州城東関帰華寺—マーロフ本ウイグル訳金光明最勝王経奥書注釈一則—」，小野和子（編）『明清時代の政治と社会』，京都大学人文科学研究所，701-706 頁。

伊斯拉菲尔・玉素甫，張宝璽 Israpil Yusup and Zhang Baoxi

2012 「文殊山万佛洞回鶻文題記」，敦煌吐魯番学研究院（編）『語言背後の歴史 西域古典語言学高峰論壇論文集』上海古籍出版社，94-106 頁。

笠井幸代 Kasai Yukiyo

2008 *Die uigurischen buddhistischen Kolophone*. Berliner Turfantexte XXVI. Brepols, Turnhout.

Kaya, Ceval

1994 *Uygurca Altun Yaruk. Giriş, Metin ve Dizin*. Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumu. Türk Dil Kurumu Yayınları : 607, Ankara.

松井太 Matsui Dai

2017 「敦煌石窟ウイグル語・モンゴル語題記銘文集」，松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

<sup>18</sup> 2023 年 8 月に蘭州大学で举行されたシンポジウム「伝承与创新：中国敦煌吐魯番学会成立四十周年国際學術検討会」において、依明・吐送江氏と陳泳君氏によって「文殊山石窟回鶻文題記解読—兼論清朝時期河西的回鶻仏教団体」と題する報告が行われたようである。残念ながら筆者は拝聴する機会を得なかった。報告が出版されることを鶴首したい。

- 2023 Old Uyghur Graffiti Inscriptions from Central Asia. In: O. Škrabal et al. (eds.), *Graffiti Scratched, Scrawled, Sprayed*. Berlin/Boston, pp. 173-214.
- 護雅夫 Mori Masao  
1997 「ウイグル語訳金光明最勝王経」『古代トルコ民族史研究』山川出版社, 545-576頁.
- Radlov, V.V., Malov, S.E.  
1913 *Suvarṇaprabhāsa (sutra zolotogo bleska), Tekst ujugurskoj redakcii*, Sanktpeterburg, Bibliotheca Buddhica XVII.
- Tekin, Şinas  
1966 Buyan evirmäk. In : *Reşid Rahmeti Arat için*. Ankara.
- 楊富学 Yang Fuxue  
2015 「文殊山万仏洞西夏説献疑」, 『西夏研究』2015年第1期.
- 姚桂蘭 (主編) Yao guilan (ed.)  
2019 『文殊山石窟』甘肅人民美術出版社.
- ツィーメ, ペーター・百濟康義 Zieme, Peter and Kudara Kogi  
1986 『ウイグル語の觀無量壽經』永田文昌堂, 京都.
- Zieme, Peter  
1991 *Die Stabreimtexte der Uiguren von Turfan und Dunhuang. Studien zur alttürkischen Dichtung*. Akademiai Kiado, Budapest.

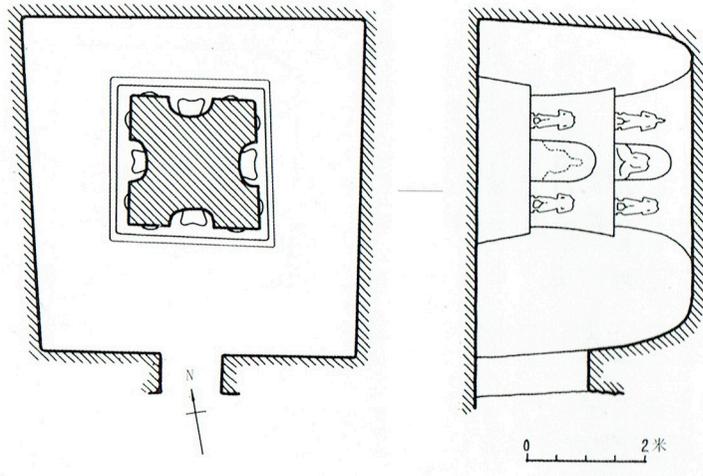


図1 文殊山前山万仏洞平面図（姚 2019 より転載）

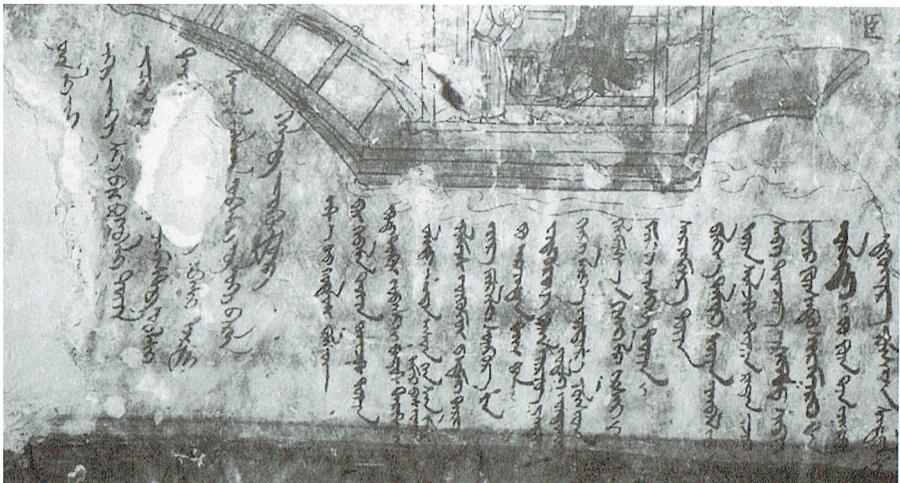


図2（伊斯拉菲尔・張 2012 より転載）